みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

北ユーラシア諸語における引用表現

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5653

北ユーラシア諸語における引用表現

庄　司　博　史

日本語の格助詞「と」には，引用節（句）を導く場合があるが，大きく次の二つの形式に分類できる。

1. 「言う」「尋ねる」「命ずる」などの言為動詞とともに，直接発話の内容を引用する場合。

〔例〕　彼は，明日来るよ，と言った。

また，「思う」「知る」などと共に心話を引用する場合もこれに含めることができる。

〔例〕　わたしは，彼が正しい，と思う。

2. 上のような言為動詞に伴われずに，行為の前提となる意志や思考を示す場合。

〔例〕　今度こそ合格するぞ，と彼は勉強した。

このほかに，このグループには，擬態擬音語を導く場合や，実際の発話内容を，言為動詞に伴われずに副詞句として表現する場合がある。

〔例〕　汽車がゴトゴトと進んだ。

みんな，さようなら，と手を振った。

1. のように，言為動詞あるいは，それに類する動詞に伴われる場合はもちろん，2. でも「(と) 言って」を補っても文は成立するため，「と」は「言う」という動詞と潜在的に深く関係していると考えることができよう。

いわゆるアルタイ語にも１の引用の助詞にあたるものが存在することは知られているが，これらは，ほとんどの場合において，２の表現にも用いられる。次にトルコ語を例にとって示す。

1′. Nereye gidiyorsun diye sordum.

どこへ行くんだいと訪ねた。

2′. İşĭk görülmesin diye pencerleri kapadĭ.

光が見えぬようにと窓を閉じた。

ここで用いられる diye は demek「言う」の副動詞形で，ほぼ日本語の「言って」に相当する。これと同様に引用の「と」に当たる位置に伝達動詞の副動詞形を用いるのは，いわゆるアルタイ語すべてにおいてみられる。2. において 1. と同じ要素が用いられるのは，1. のような具体的伝達行為を示す表現形式が，2. のような目的・意志などの内的抽象的行為の表現に内話として迂曲的に用いられたためとみることができよう。ところで「と」に相当する要素がこれらの言語で必要なのは，次のような理由によると考えられる。まず，基本語順が SOV であるため，補語としての引用節は述語動詞に先行することになる。これらの言語では，補文を名詞化することも可能であるが，引用節の場合は，名詞化により文としての陳述度が後退することは，避けがたい。したがって，引用節を，地の文からそのままの形で保護し，また統辞的機能を標示する要素が必要になる。そのような要素として日本語では，格助詞「と」が用いられたのに対し，アルタイ諸語では上記のように「言う」を意味する動詞の副動詞形を用いたわけである。注目すべきは，日本語の動詞「言う」と異なり，アルタイ諸語においては，最も基本的な「言う」を意味する動詞は，その補語としての引用節に「と」に当る要素を必要とせず直接後置されることである。したがって，このことが，副動詞の本来の動詞性をほとんど払拭し文法機能のみを持つ小辞に転化させる原因になったと考えられよう。また，これらの現れる位置は 1′. 2′. のように，引用節の後，すなわち述語動詞側であり，SOV を基本語順とする言語が一般に統辞機能標示素を後置するという原則と合致している。ところが，実際には引用節が，本動詞の後に現われるという，基本語順からみれば，変則的な例がみられる。しかし，基本文型をとった場合，引用節が長いと，理解するうえで文末の本動詞まで相当の心理的負担がある。ところが，引用節が，後置されると，本動詞は以下に続く引用節を予告することになり，負担は軽減される。つぎの古代チュルク語にみられるように，本動詞を予告語として引用節に先行させる表現は，ほとんどのアルタイ諸語で定型化しているようである。

bodisatawa inča tip saqinti ..... <u>tip.</u>

ボーディサタウはこう（言って）考えた「……」と。

ところで副動詞形を引用の小辞として用いる非常に類似した表現が，ウラル語族のチェレミシ語とヴォチャーク語においてみられるが，これは，チュルク系諸語の影響によるものと考えられる。以下はヴォチャーク語の例である。

mon Jegipetyn ju vuzaske šusa kylum.

私はエジプトの穀物が売られたと聞いた。

eksei kunojosyz adz šusa pyrem.

王は客を見るんだと入ってきた。

ところが，ヴォチャーク語やジリエーン語には，pe ～ pä などの小辞が引用節の標識として用いられる。

'acim-no ug todki' pä šuam.

自分自身も知らない，と言った。

しかし，この要素は，アルタイ諸語におけるように，必ずしも引用節のあとに置かれるとは限らず，引用節の間にわりこむ例が多くみられる。これは，多くのウラル諸語において「言う」を意味する動詞が引用節にわりこむ傾向があることと一致していると考える。そして，このような場合，これらは，伝聞の文副詞にちかい機能を持つように思われる。ウラル語のこのような特徴はアルタイ諸語と異なると思われるが，これは，ウラル語が，一般に考えられているように，厳密な意味で，動詞文末言語ではないことからきているのかもしれない。

参 考 文 献

Kissling, H. J. *Osmanisch-türkische Grammatik.* Wiesbaden 1960.

Майтинская, К. Е. *Служеные слова в финно-угорских языках.* Москва 1982

Poppe, Nicholas *Grammar of written Mongolian.* Wiesbaden 1974.

Schlachter, W. Syntaktische Beiträge zur Geschichte der finnisch-ugrischen Konjunktionen. *Finnisch-ugrische Forschungen* XL 1973. pp. 202–213.

Siro, Paavo, *Puhumista merkitsevät verbit itämerensuomalaisissa kielissä.* Helsinki 1949.

神谷かおる 「引用形式からみた物語文章史」『日本語学』2 月号 1973. vol 2 66-75 頁